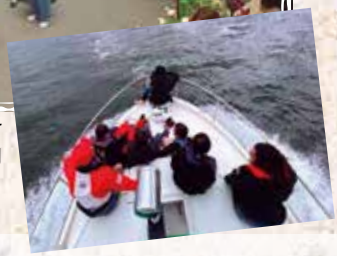

児童養護施設の子どもたちや先生140人が、24艇のボートやヨットに分乗して東京湾をクルージング。今年で31回目の開催となった。来年、2024年は4月21日(日)を予定。問い合わせ：東京ヨットクラブ 小島正和(090-3225-8283)

海で出会った「ちょっといい話」

文＝田久保雅己
text by Masami Takubo

1996年から7年間、本誌編集長を務め、現在は『シードリーム』誌編集長。UMI協議会会長をはじめマリン関連団体の要職を務める。

第25話 子どもたちを海へ招いて31年

東京夢の島マリーナは、1992年に東京都の公営マリーナとして開港しました。その後、運営形態はさまざま変わりましたが、現在は指定管理者としてスバル興業株式会社が運営しています。開港後、係留艇のオーナー有志によって東京ヨットクラブ(TYC)が創設され、昨年、創立30周年を祝う式典が帝国ホテルで盛大に開催されました。

TYC創設の翌年、1993年4月に児童養護施設の子どもたちをボートに乗せて、東京湾を体験してもらおうと「第1回 子供の日クルージング」が開催されました。

両親がいない児童や虐待されている児童などの自立支援をする福祉施設、児童養護施設の子どもたちをボートに招こうと、パワーボート〈第三たていし丸〉のオーナー立石勲さんの発案で、〈シグモア〉の高山務オーナー、〈久光〉の倉前雅和オーナーが協力。6施設60名の子どもたちを8艇のボートに招待して実施されたのが始まりでした。

東京都に登録されている養護施設は約60カ所ありますが、東京都社会福祉東京善意銀行を通じて各学園に公募、毎年およそ15施設の児童を対象に実施されてきました。昨年までの3回はコロナ禍のため、第1回から続いている立石さんが経営する会社、立石建設から贈呈されるお菓子を各施設に贈呈するにとどめていましたので、実際に乗艇できた今年は4年ぶりの開催となりました。

好天に恵まれた4月23日(日)、今年で31回を数える子供の日クルージングの当日を迎えました。乗船に協力してくれるボート16艇、ヨット8艇。招待された児童(小学生～高校生)および先生は14施設140名が朝8時30分に続々とマリーナに集まり、受付が始まりました。

受け入れるボランティアスタッフは協力艇のオーナー、クルーなど70名。陸上でのお手伝い30名。総勢約100名が協力し、皆さん笑顔で子どもたちをお迎えします。準備は前日から始まりますが、下船後に予定されている餅つきのために、4年間使用していなかった臼(うす)や杵(きね)の整備、風船や輪投げの準備など、スタッフの皆さんのボランティア・スピリットに頭が下がります。

開会式に続き、すでに艇長会議を済ませた協力艇と児童のカップリングが行われ、子どもたちは24艇に分乗。そしていよいよ9時半に出港です。夢の島マリーナの沖へ出ると、ディズニーランドを海から見渡すこともでき、子どもたちは大喜びです。

約2時間のクルージングを終えると、クラブハウスの2階に上がり、餅つきや輪投げなどを楽しみ、スタッフが早朝から仕込んだカレーライスをいただきます。乗船時に緊張していた子どもたちも、クルーたちが親しく声掛けするなどして徐々に表情が緩み、スタッフが用意したイベントと食事が終わり、午後1時に行われた閉会式の頃には、マリーナのアトリウムいっぱいに子どもたちの楽しそうな笑い声が響き渡りました。

これまでは終了後に東京都福祉保健局の後援で、夢の島公園施設、熱帯植物園および葛西臨海公園、水族館などに子どもたちを無料で招待するそうですが、今回は実施されませんでした。

乗船したときの印象を絵や作文で応募してもらい、優秀賞には“たていし丸賞”が与えられ、アトリウムに掲示されます。後日、14の施設から届いた子どもたちの手紙には「海でしゃべり相手になってくれてありがとう!」、「船に乗ったお兄さんたちが面白かった」、「少しよったときにそばにいてくれて、ありがとう」、「また行きたいです」など、心温まる触れ合いを想起させる感謝の言葉があふれていました。